

# 京都大学日本語科目履修者の履修動向

—2017年度実施のカリキュラム改編後の履修データを基に—

ルチラ パリハワダ\*

## 要 旨

本稿では2017年度に遂行されたカリキュラム改編後の、4学期間の、日本語科目履修者の履修データを分析することを通して、学習レベル、履修者の身分並びに学習技能に着目しながら、大学における日本語学習者のニーズ分析を試みた。その結果、全体における非正規生の履修率の高さが明らかになった。また、学部生と非正規生のニーズに異なる側面が見られること、学部生は特定技能強化コース及びアカデミック・スキルコースを中心に科目履修をしているのに対し、総合学習コースを最も多く履修する非正規生は集中的に学ぶニーズを有している可能性が示唆された。更に、全学共通科目日本語科目と課外の日本語学習支援講座の履修動向の相違について考察した。

【キーワード】 大学日本語教育、履修動向、身分、学習ニーズ

## 1. はじめに

京都大学の日本語教育カリキュラムは2017年度より改編された。改編の主たる目的は、従来補講として開設してきた日本語授業を、国際高等教育院が提供する単位付与科目として、全学共通科目の中に体系的に位置付けることである<sup>1</sup>。改編により単位付与科目となった日本語科目は全学共通科目外国語科目として位置付けられた。一方、単位付与科目の履修資格を有さない学習者層にも日本語学習の機会を提供することを目的に同時に課外の日本語学習支援講座としての日本語授業も開設することとなった<sup>2</sup>。京都大学では、現在この2プログラム編成で日本語教育が行われている。

大学における日本語教育カリキュラムは様々なニーズに応えるものでなければならない。その最も重要な役割の一つは、学位取得を目指す学部・大学院の正規生の学習支援で、滞りなくそれぞれの教育課程を修了できるだけの日本語能力の習得を支援することである。一方で、履修者総数における非正規生の比率は増加の一途を辿っており、そのニーズにも応える必要がある。

このように多様化するニーズに即した教育を提供していくためには、学習者のニーズの把握が不可欠である。Nation & Macalister (2010) が指摘しているように、ニーズ分析を行うことにより、ある教育プログラムが学習者の求めているもの、すなわちニーズに合致したものであるか、求められている条件に適したものであるかを判断可能だからである。更に、畑佐(2018)が述べている通り、学習者と教育機関の双方が学習者のニーズを把握することで、相互に連携可能なカリキュラムを構

\* 京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・教授

築し、ニーズと実態の間のギャップを埋めていくことが可能となる。ここから窺えるように、ニーズ分析は、科目設計を行う際の基礎資料としてのみならず、その検証や改善の手段としても有効である。

ニーズ把握の方法として様々なものが考えられる。日本語教育学会編『日本語教育機関におけるコースデザイン』（1991）、Nation & Macalister（2010）や畑佐（2018）などで指摘されているようにプログラム開始前に実施する事前アンケートやインタビュー等の調査による学習者の個別ニーズの把握はその最も代表的な方法である。

ニーズ把握もさることながら、カリキュラムに対する評価も教育の質保障に欠かせない一部となる。その必要性については日本語教育学会編『日本語教育機関におけるコースデザイン』（1991）、Nation & Macalister（2010）や札幌野（2011）で指摘されている。カリキュラム評価の一般的な方法として授業アンケートなどが活用されている。

Nation & Macalister（前掲）は学習ニーズを1）必要性、2）不足、3）希望という三カテゴリーに分類している<sup>3</sup>。必要性とは「入学試験を日本語で受験しなければならない」などの学習動機に起因する学習の必要性である。一方、不足とは未習得の学習項目や不足している技能等である。最後の希望とは、目標言語の習得のために必要な学びに対する学習者の考えを示すカテゴリーである。

本稿では学習者のニーズを知る手掛かりとして履修者数に着目する。履修科目が位置付けられている日本語のレベル、履修者の身分及び習得対象の技能を基準としながら、本学の日本語学習者の履修動向を分析し、大学で学ぶ日本語学習者がどのような学習ニーズを有しているのかを検討する。なお、カリキュラム改編後の4学期間の科目・講座別履修者数を本稿の分析対象とする。4学期間のデータは客観的な傾向性を抽出するのに十分とは言い難いが、改編前後のデータに質的相違がある可能性が高いため、上述の期間に本稿の分析対象を限定する。

以下において、まず京都大学日本語教育のカリキュラム・デザインの概略（第2節）を述べた上で、日本語科目のレベル別履修状況（第3節）、日本語学習者の身分別履修状況（第4節）、技能別履修状況（第5節）の順に考察を行う。

## 2. 京都大学日本語教育のカリキュラム・デザイン

上述した通り京都大学の日本語教育プログラムは

- 1) 全学共通科目日本語科目
- 2) 課外の日本語学習支援講座

という二つのプログラムから構成されている。

全学共通科目日本語科目は表1の通り総合学習コースと特定技能強化コースより構成されている。

表1からも明らかなように、2017年度に導入された新カリキュラムでは、全学共通科目日本語科目における日本語の学習レベルは、日本語能力試験に合わせて、初級I、初級II、中級I、中級II、上級の5段階に区分された。それぞれの到達目標は表2のように定められている。

表2からも窺える通り、全学共通科目日本語科目の最終到達目標は、大学における学術活動に必要な日本語のアカデミックな応用力を習得することである。同最終到達目標設定は、Nation & Macalister（2010）のいう必要性ニーズに基づいていると言える。

全学共通科目日本語科目の提供科目数は2017年度前期35科目、同後期33科目、2018年度前期37科目、同後期37科目で、4学期間の1科目当たりの平均履修者数は22.04である。

表1 全学共通科目日本語科目の科目設計

学習形態		レベル		授業科目名
総合学習 コース	4H コース (週2コマ <sup>4</sup> の 授業から成る コース)	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I A、B (4H コース) <sup>5</sup>
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II A、B (4H コース)
		中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I A、B (4H コース)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II A、B (4H コース)
	8H コース (週4コマの 授業から成る コース)	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I (8H コース) <sup>6</sup>
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II (8H コース)
		中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (8H コース)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II (8H コース)
	大学院共通科 目 <sup>7</sup>	中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I A、B (総合)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II A、B (総合)
上級 (JLPT N1 相当)		日本語上級 A、B (総合)		
特定技能強 化コース	会話	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I (会話)
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II (会話)
		中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (会話)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II (会話)
		上級 (JLPT N1 相当)	日本語上級 (会話)	
	聴解	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I (聴解)
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II (聴解)
		中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (聴解)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II (聴解)
	上級 (JLPT N1 相当)	日本語上級 (聴解)		
	読解・作文	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I (読解・作文)
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II (読解・作文)
	作文	中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (作文)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II (作文)
		上級 (JLPT N1 相当)	日本語上級 (作文)	
	読解	中級	中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (読解)
			中級 II (JLPT N2 相当)	日本語中級 II (読解)
		上級 (JLPT N1 相当)	日本語上級 (読解)	
	漢字	初級	初級 I (JLPT N5 相当)	日本語初級 I (漢字)
			初級 II (JLPT N4 相当)	日本語初級 II (漢字)
		中級 I (JLPT N3 相当)	日本語中級 I (漢字)	
	アカデミック・ スキル	上級 (JLPT N1 相当)	日本語上級 (討論技術)	
上級 (超級、JLPT N1 以上)		日本語上級 (研究発表)		
		日本語上級 (講義聴解)		
		日本語上級 (論文・レポート作成)		

次に、正課外の日本語教育プログラムとして位置付けられた課外の日本語学習支援講座の概略を述べる。全学共通科目日本語科目と課外の日本語学習支援講座の主な相違は、

- 1) 位置付け
- 2) 単位付与の有無
- 3) 科目設計の方法
- 4) 履修・受講可能な学習者層<sup>8</sup>

の4つに大別できる。その要点は表3の通りである。

課外の日本語学習支援講座のコースデザインは表4の通りである。

課外の日本語支援講座の特徴の一つは特定の技能に特化することなく、総合的に学習可能な形で科目設計が行われていることである。専門の学習で忙しく、日本語学習に割ける時間が限られてい

表2 全学共通科目日本語科目のレベル別到達目標

レベル	到達目標
初級 I	基礎語彙と初級の基本文型の前半を習得する。身近な話題について、平易な文が理解できる。相手がゆっくり話してくれれば、質問に答えたり、意思表示をしたりして、簡単なやり取りができる。JLPT N5/CEFR A1 レベルに相当
初級 II	基礎語彙を増やし、初級の文型の習得を終える。日常生活に役立つ、簡単な文の読み書きや会話ができる。身近な話題について、平易なことばで情報交換や説明ができる。JLPT N4/CEFR A2 レベルに相当
中級 I	初級で学んだ語彙・文型を自由に使いこなし、ある程度まとまった内容の理解・発言ができる。一般的な話題について、正確に理解でき、根拠を示しながら意見を述べ、自身の経験や希望などを説明できる。JLPT N3/CEFR B1 レベルに相当
中級 II	より幅広い場面で、自然に近いスピードの日本語の聞き取りができる。ある程度まとまりのある学術的な文章が理解できる。状況や場面の目的に応じた効果的な会話ができ、的確な説得力のある文章を作ることができる。JLPT N2/CEFR B2 レベルに相当
上級	専門の学習・研究に役立つ日本語応用力を向上させる。不自由なく大学の講義が理解でき、学術的な文章の読み書きや議論ができる。文法的な誤りが少なく、場面に応じた言い回しやことばの使い分けができる。違和感を与えることなく自然なやり取りができる。JLPT N1/CEFR C1~C2 レベルに相当

表3 全学共通科目日本語科目及び課外の日本語学習支援講座の比較

	全学共通科目日本語科目	課外の日本語学習支援講座
位置付け	全学共通科目外国語科目群初修外国語科目として位置付けられている。	正課外の講座として位置付けられている。
単位付与の有無	付与される。	付与されない。
科目設計の方法	学習形態を基準に、 ・総合学習コース ・特定技能強化コース に区分される。それぞれのコースが更にレベル別の科目から構成される。	学習・実施目的を基準に、 ・入門コース ・遠隔講義 ・ビジネス日本語 に区分される。 前者の二つはレベル別に更に下位区分される。
履修・受講可能な学習者層	国際高等教育院の聴講生登録をしていない研究生、「特別研究生」 <sup>9</sup> 、研究者、配偶者は履修できない。	全ての学生、研究者が履修できるが、配偶者は履修できない。

表4 課外の日本語学習支援講座の設計

日本語レベル	講座名	授業形態	実施キャンパス
初級 I	日本語入門コース I A.B	対面式	吉田キャンパス
初級 II	日本語入門コース II A.B	対面式	吉田キャンパス
中級 I	日本語中級講座 I A.B	遠隔講義	桂キャンパス発信・宇治キャンパス受信
中級 II	日本語中級講座 II A.B	遠隔講義	吉田キャンパス発信・桂キャンパス及び犬山受信
上級	日本語上級講座 A.B	遠隔講義	桂キャンパス発信・宇治キャンパス受信
	ビジネス日本語講座 I A.B	対面式	吉田キャンパス
	ビジネス日本語講座 II A.B	対面式	桂キャンパス

る学習者にも日本語学習の機会を提供することを目指す。入門コースは円滑な学生生活のために必要なミニマルな日本語の習得を目的とする。一方遠隔講義は、日本語の授業の殆どが開講されている吉田キャンパスだけでなく、桂や宇治などの遠隔地キャンパスで学ぶ学生にも日本語教育の機会を提供することを目的としている。学術情報メディアセンターとの連携により、日本語中級講座 I・II 及び日本語上級講座を遠隔配信している。

更に、就職活動や就職後の社会活動を円滑に行うことのできる、日本語の実践的応用力の習得を目指すビジネス日本語講座も吉田キャンパス及び桂キャンパスで開設している。

課外の日本語学習支援講座のもう一つの目的は、単位付与の全学共通科目日本語科目の履修資格を有さない「特別研究学生」や国際高等教育院の聴講生登録をしていない研究生、並びに研究者にも日本語教育の機会を提供することである。

全学共通科目日本語科目を初修外国語科目として履修する学部学生にとって、卒業に必要な単位取得が履修の一つの目的となり、その必要性ニーズが履修動機となり得る。一方、課外の日本語学習支援講座の場合は、単位取得そのものが履修動機とならない。いずれのプログラムの場合も、その他の必要性ニーズ（研究室における教員や他学生との円滑なコミュニケーションを行うための日本語習得など）や不足（会話が不足している）あるいは希望（日本語コミュニケーション能力を習得したい）などのニーズが履修動機となっている可能性がある。

以上、全学共通科目日本語科目及び課外の日本語学習支援講座の概略を記した。以下において、各プログラムの履修動向についてレベル、身分、技能という三つの観点から検討する。なお、以下において履修状況を明らかにするために用いるデータは履修者の実数ではなく、延べ数である<sup>10</sup>。

### 3. 日本語科目のレベル別履修状況

本節では先ず京都大学日本語科目における学習者のレベル配置方法について簡単に触れた上で、全体的な履修動向について学習レベルに着目しながら考察する。

#### 3.1 レベル配置について

学習レベルの決定は第一に、オンラインプレースメントテスト<sup>11</sup>の結果によって行っている。プレースメントテストは語彙、文法、読解（会話を題材とした読解を含む）、作文・表現及び表記（漢字）から構成されている。テスト問題の構成は N5 から N1 まで段階的に難易度が上がっていく仕

組みとなっている。レベル分けは原則として総合点数を基に行うが、個別項目の習熟度も考慮に入れている。

履修者の中に当然継続者もいる。継続者に関してはプレースメントテスト免除基準を設けている。2017年度において身分別に免除基準を設けていたが、免除認定作業は非常に複雑で、労力の要するものであったため、2018年度前期より、その簡易化を図り、表5の通りに改定した。

なお、免除者の人数は表6の通りである<sup>12</sup>。

以上考察したように、レベル配置は学習者のテスト受験時・免除時における到達度を基準にしながら、次の段階の学習を可能にするものとなっている。故に、レベル配置は学習者の不足のニーズに基づいていると言える。

しかし、不足ニーズだけを唯一のレベル判断の基準としているわけではなく、学習者の希望や必要性ニーズにも応えられるように履修相談システムを設けている。配置レベルの変更を希望する学生は同システムを利用し、コーディネーター教員と相談できる。相談内容の中に、「会話を上達したい」や「漢字が弱い」といった学習者の学習に対する希望や不十分で強化の必要があると自ら認識している特定技能等に対する不足のニーズに基づいた相談が含まれている。更に、「専門の文章を読まなければならないので、読解力を高めたい」や「母国大学の単位振替の条件を満たすために、会話と聴解を履修したい」といった必要性ニーズに基づいた相談も多く含まれる。学習に支障をきたす恐れがなければ、上述のような変更理由を正当な理由と見做し、レベル変更や配置されたレベ

表5 プレースメントテストの免除基準

実施時期	対象者	免除の基準
2017年 前期・後期	工学部国際コース2年次以降	1) 前年度4コマ以上履修し、かつ成績B以上(平均)の学生 2) 成績C以下(平均)であっても面接・ガイダンスを受け認められた学生
	学部正規生(工学部国際コース以外)の2年次以降	1) 前学期2コマ以上履修し、かつ成績B以上(平均)の学生 2) 成績C以下(平均)であっても面接・ガイダンスを受け認められた学生
	交換留学生(一般交換、KUINEP学生)2学期目以降	1) 前学期3コマ以上履修し、かつ成績B以上(平均)の学生 2) 成績C以下(平均)であっても面接・ガイダンスを受け認められた学生
	予備教育生の予備教育修了後以降(2学期目以降)	1) 前学期履修科目のうち、3科目以上成績B以上(平均)の学生 2) 成績C以下(平均)であっても面接・ガイダンスを受け認められた学生
2018年度 前期以降	8Hコース履修者及び4Hコース履修者	直前の学期において8Hコースを履修し、合格した者及び4Hコース(後期に開講する4Hコースの後半の履修を必須条件としている)の合格者

表6 プレースメントテスト免除者数

年度	学期	免除者数
2017年度	前期	120名
	後期	117名
2018年度	前期	112名
	後期	105名

ルと異なるレベルの科目の追加を認めている。

### 3.2 レベル別履修状況

レベル別履修状況の全体像は表7及び表8の示す通りである。

表7が示している通り、全体的に見た場合、履修者が最も多いのは上級レベルである。上級レベルは日本語のアカデミックな実践力の習得を目指すレベルであり、その必要性が高いことが窺われる。上級レベルでは日本語学習を通してアカデミックなスキルを磨き、学術訓練を行うので、専門教育への応用可能性も高い。後述するが、とりわけ学部生においては上級レベルの日本語履修が顕著である。上級レベルに次いで、初級Ⅰレベルの履修が多く、大学入学後に本格的な日本語学習を始める学習者も少なくないことが分かる。更に、初級Ⅱレベルの学習者が比較的少ないことから、既に初級終了段階まで到達しているか、ゼロ初級者かという二極化の兆しが現れていることが窺われる。

一方、課外の日本語学習支援講座のレベル別の内訳は表8の通りである。日本語入門コースⅠは履修者が多く、2クラスを開講している。その他の講座は各一クラスずつ開講しているが、ビジネス日本語のみ、同じ講座を吉田キャンパス及び桂キャンパスで開いている。表が示している通り、入門コースⅠの受講者が最も多い。入門コースでは初級レベルの語彙・文法を習得しながら、コミュ

表7 全学共通科目日本語科目レベル別履修状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
初級Ⅰ	160	125	190	163	638 (20.38%)
初級Ⅱ	76	75	114	106	371 (11.85%)
中級Ⅰ	113	125	186	161	585 (18.69%)
中級Ⅱ	109	171	147	207	634 (20.26%)
上級	269	170	228	235	902 (28.82%)
合計	727	666	865	872	3130

表8 課外の日本語学習支援講座レベル別受講状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
日本語入門コースⅠ	55	42	78	86	261 (31.87%)
日本語入門コースⅡ	41	45	21	24	131 (16.00%)
日本語中級講座Ⅰ	23	28	16	26	93 (11.36%)
日本語中級講座Ⅱ	36	42	33	34	145 (17.71%)
日本語上級講座	13	24	7	6	50 (6.11%)
ビジネス日本語講座Ⅰ(吉田)	32	70	6	8	116 (14.16%)
ビジネス日本語講座Ⅱ(桂)	4	11	3	5	23 (2.81%)
合計	204	281	164	189	819

ニケーション能力の養成を目指しており、必要性、不足、希望のどのニーズも存在していると考えられる。大学コミュニティの生活者としての未習者にとって入門コースは心のよりどころにもなり得る。

課外日本語学習支援講座の平均履修者数は1講座当たり25.59であり、全学共通科目日本語科目の同数値をやや上回っている。

#### 4. 日本語学習者の身分別履修状況

京都大学には2018年10月1日現在2576名の留学生在籍している。その内訳は学部正規生234名、大学院正規生1728名、交換留学生178名、研究生422名、その他の聴講生14名となる。それらの留学生の履修状況について以下において先ず、留学生の身分とそれを基準とした履修可否について取り上げた上で、身分別の履修動向について考察したいと思う。

##### 4.1 日本語科目履修者の身分

京都大学で学ぶ留学生の身分は表9の示す通りであり、身分別に全学共通科目日本語科目の履修可否が定められている。

表9 全学共通科目日本語科目の身分別履修可否

留学生の種別	身分	全学共通科目日本語科目の履修可否	単位認定
国費及び私費留学生	学部学生	○	○
	大学院生	○	○
	研究生	×	×
	(部局の研究生のまま) 国際高等教育院の聴講生とみなす	○	×
	研究生(院)	×	×
	(部局の研究生のまま) 国際高等教育院の聴講生とみなす	○	×
KUINEP 学生 <sup>13</sup>	特別聴講学生	○	○
交換留学生 (KUINEP 以外)	特別聴講学生	○	○
	特別聴講学生(院)	○	○
	特別研究学生(院)	×	×
	特別交流学生(院)	○	○
日本語・日本文化研修留学生	科目等履修生	○	○
予備教育	聴講生	○	× (聴講)
予備教育(日韓)	聴講生	○	× (聴講)
予備教育(kyoto-iUP)	聴講生	○	× (聴講)
短期交流学生	短期交流学生	×	×



## 4.2 身分別履修状況

身分別履修状況の全体像は表10の通りであり、非正規生の日本語履修の比率の高さが顕著に現れている。

### 4.2.1 学部生

学業遂行に高い日本語能力が要求されると考えられる学部生の履修は全体の9.01%を占めており、留学生総数における学部生の割合(9.08%)にほぼ比例している。表11が示している通り、在籍留学生数の多い工学部、経済学部で学部履修者が集中している。

表12の「全学共通科目履修の手引き」(抜粋)が示す通り、学部学生の、外国語科目としての日本語科目の履修について、履修できる日本語レベルや単位の上限について学部別に定められている。経済学部の場合、平成29年度以降の入学者に対して日本語単位を16単位まで卒業単位として認めており、そのことも履修者数(延べ人数)を左右している可能性がある。しかし、日本語単位を12単位まで卒業単位として認めている理学部においては履修者が皆無であることから、卒業認定単位数の上限が必ずしも履修者数を左右するわけではないということが窺われる。

学年に着目すると、学部生の日本語履修は低学年であればあるほど多く見られる(表13)。日本

表10 全学共通科目日本語科目身分別履修者数

身分	履修者数				合計 (%)
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
学部生	69	46	96	71	282 (9.01%)
大学院生	179	101	208	218	706 (22.56%)
非正規生	479	519	561	583	2142 (68.43%)
合計	727	666	865	872	3130

表11 学部生の部局別履修状況

学部	履修者数				合計
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
総合人間学部	2	0	0	0	2
文学部	1	0	0	0	1
教育学部	0	0	3	2	5
法学部	0	0	0	0	0
経済学部	20	12	35	23	90
理学部	0	0	0	0	0
医学部(医学科)	0	0	0	0	0
医学部(人間健康科学科)	0	0	0	0	0
薬学部	0	0	0	0	0
工学部	43	31	54	39	167
農学部	3	3	4	7	17
合計	69	46	96	71	282

語が原則的に学習言語であることから考えると、効果的な履修行動をとっていると言える。その上、高学年になると専門教育を受けなければならないことから考えても、低学年においてそれに耐える日本語力を養成しておく必要性ニーズが存在すると言える。

更に、表 14 が示している通り、学部生の日本語履修の 84.40% が上級レベルに集中している。表 12 の「全学共通科目履修の手引き」(抜粋) が示している通り、平成 29 年度以降、日本語科目を外国語科目として認定する学部では、上級レベル科目の履修をその要件として定めている。なお、理学部のみ上級レベルに加えて、中級レベルの単位履修も認めている。また、初級 I、初級 II レベルの履修は 4H コースに限定されており、全履修者は工学部在籍者である。

表 12 学部生の単位認定対象クラス

学部	履修クラス		
	平成 27 年度以前入学者※ 1	平成 28 年度入学者	平成 29 年度以降入学者
総合人間学部	日本語中級、日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 4 単位まで。上級科目を少なくとも 2 単位含むこと。	日本語中級、日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 8 単位まで。上級科目を少なくとも 4 単位含むことが望ましい。	日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 8 単位まで。
教育学部	日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 4 単位まで。	日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 8 単位まで。	
経済学部	日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 8 単位。	日本語上級、「経済・経営日本語（上級）I・II」から 16 単位。	
理学部	日本語中級、日本語上級から 4 単位以上 6 単位まで。（平成 20 年度入学者は 6 単位。）	日本語中級、日本語上級から 12 単位まで。	
薬学部	日本語上級から 4 単位以上。	日本語上級から 8 単位以上。	
工学部※ 2・農学部	日本語中級、日本語上級から 4 単位以上。	日本語中級、日本語上級から 8 単位以上。	日本語上級から 8 単位以上。

※ 1 上述のとおり、上記単位数の 2 分の 1 が卒業に必要な単位として算入されます。  
 ※ 2 工学部地球工学科国際コースの外国人留学生は、国際コース向けに提供される「日本語初級 I A・I B・II A・II B」を履修してください。ただし、入学時のプレースメントテストに従い、日本語中級あるいは日本語上級の履修も可能です。中級以上の日本語の履修については、日本語コーディネーターと相談してください。

出所：京都大学「全学共通科目履修の手引き」より抜粋（外国語）  
<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0796.pdf?1520873205>

表 13 学部生の学年別全学共通科目日本語科目の履修状況

学年	履修者数				合計 (%)
	2017 年度		2018 年度		
	前期	後期	前期	後期	
1 回生	21	33	42	43	139 (49.29%)
2 回生	37	7	35	19	98 (34.75%)
3 回生以上	11	6	19	9	45 (15.96%)
合計	69	46	96	71	282

#### 4.2.2 大学院生

表 10 が示している通り、大学院生の日本語履修は全体の 22.56% を占めている。部局別の内訳に着目すると、履修者数（延べ人数）は経済学研究科、工学研究科、経営管理研究部・経営管理教育部の順に高い。これらはいずれも国際コースを開設している部局であり、日本語履修のニーズが比較的高いと考えられる。文系研究科では日本語で研究を行う場合が多いと考えられるが、既に十分な日本語力を修得しているためか、経済学研究科及び経営管理研究部・経営管理教育部を除く文

表 14 学部生のレベル別全学共通科目日本語科目の履修状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017 年度		2018 年度		
	前期	後期	前期	後期	
初級 I	1	1	5	4	11 (3.90%)
初級 II	4	0	1	0	5 (1.77%)
中級 I	1	2	1	2	6 (2.13%)
中級 II	4	9	3	6	22 (7.80%)
上級	59	34	86	59	238 (84.40%)
合計	69	46	96	71	282

表 15 大学院生の部局別全学共通科目日本語科目の履修状況

大学院	履修者数				合計
	2017 年度		2018 年度		
	前期	後期	前期	後期	
文学研究科	10	0	3	1	14
教育学研究科	1	0	0	0	1
法学研究科	10	0	11	5	26
経済学研究科	9	19	24	53	105
理学研究科	15	3	3	16	37
医学研究科	17	10	24	19	70
薬学研究科	4	4	0	0	8
工学研究科	22	17	28	29	96
農学研究科	25	13	15	22	75
人間・環境学研究科	7	1	4	6	18
エネルギー科学研究科	3	11	20	14	48
アジア・アフリカ地域研究研究科	3	2	3	2	10
情報科学研究科	7	3	12	13	35
生命科学研究科	5	2	5	6	18
地球環境学堂・地球環境学舎	15	7	21	9	52
公共政策連携研究部・公共政策教育部	0	0	0	0	0
経営管理研究部・経営管理教育部	22	5	32	21	80
総合生存学館	4	4	3	2	13
合計	179	101	208	215	706

系研究科に高い履修率が見られない。

レベル別に見た場合、表 16 が示す通り、大学院生の日本語履修は中級 I、上級、中級 II の順に高いが、一つのレベルへの著しい偏りが見られない。

2018 年度前期から大学院横断科目が指定され、大学院共通科目として開設された。日本語科目として、日本語中級 I A・B（総合）、日本語中級 II A・B（総合）及び日本語上級 A・B（総合）が開講された。その履修状況は以下の通りであり、今後履修者のニーズに沿うよう工夫が必要である。

#### 4.2.3 非正規生

研究生身分は研究活動に従事することを前提に付与される身分であるため、研究生は原則全学共通科目日本語科目の履修が認められていない。しかし、研究生の中に大学院に進学する学生も多く、研究生期間をその準備期間として利用している場合も少なくない。故に、その期間中に大学院進学後の研究活動に必要な日本語力を身に付けるニーズ、すなわち必要性ニーズが存在する。そのようなニーズを考慮し、日本語科目を提供する国際高等教育院<sup>14</sup>の聴講生として登録した場合に限り、研究生にも全学共通科目日本語科目の履修を認めている。

なお、国際高等教育院に在籍する日本語・日本文化研修留学生は、全学共通科目として位置付けられた表 2 に記した日本語科目と異なる、専用のアカデミック・ジャパニーズ科目を履修する。一方、同じく国際高等教育院に在籍する日本語予備教育集中プログラム生（文部科学省国費留学生）及び日韓共同理工系学部留学生プログラムの学生（日韓生）は聴講生として表 2 で示した全学共通科目を履修する。

表 10 から明らかな通り、全体的な傾向性として注目に値するのは、非正規生が全学共通科目日本語科目履修者の実に 7 割近くを占めていることである。中でも、聴講生の履修が顕著であり、

表 16 大学院生のレベル別全学共通科目日本語科目の履修状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017 年度		2018 年度		
	前期	後期	前期	後期	
初級 I	25	24	28	33	110 (15.58%)
初級 II	25	18	39	33	115 (16.29%)
中級 I	33	30	51	60	174 (24.65%)
中級 II	33	14	51	47	145 (20.54%)
上級	63	15	39	45	162 (22.95%)
合計	179	101	208	218	706

表 17 大学院共通科目の履修状況

科目名	2018 年度		合計
	前期	後期	
日本語中級 I（総合）	2	2	4
日本語中級 II（総合）	9	3	12
日本語上級（総合）	3	0	3
合計	14	5	19

非正規生の61.06%を占めている(表18)。表9が示す通り、聴講生には国際高等教育院の聴講生として登録した研究生と日本語予備教育集中プログラム生及び日韓生が含まれる。日本語予備教育集中プログラム生の受け入れは、2017年度前期は35名、2017年度後期は6名(教員研修留学生2名を含む)、2018年度前期は35名、同後期は7名(教員研修留学生3名を含む)である<sup>15</sup>。

国際高等教育院で受け入れた研究生身分の聴講生の実数は、2017年4月は64名、2017年10月は182名、2018年4月は79名、同10月は180名であった。直近の学期、つまり2018年後期では422名の研究生の中の180名(42.65%)が聴講生登録をしていることになる。その数値からも窺えるように、研究生は日本語履修に対する高いニーズを有している。また、特別聴講学生も全体の26.56%を占めており、交換留学生にとっても日本語履修が重要な学習の一環となっていることが示唆される。

特別聴講学生のレベル別履修状況を見てみると、表19の通り初級Iレベルの学習者が最も多いことが分かる。その上、初級Iの履修者は後期において比較的多い。交換留学生の受け入れは後期が多く、受け入れ人数の相違に左右されている可能性がある。初級Iレベルに次いで、上級レベルの学習者が多いが、一つのレベルへの著しい偏りは見られない。

特別聴講学生と同様に聴講生の場合も初級Iレベルの学習者が最も多い。それに対して、初級IIレベルの履修者は最も少ない。前期において初級Iレベルの学習者が多いのは前期に受け入れる日本語予備教育集中プログラム生が多いためであると推察される。中級IIレベルでは後期の方が前期と比較して履修者が多い。上述したように国際高等教育院に聴講生として登録している研究生は後期に多く、それによる影響が示唆される。

表18 全学共通科目日本語科目を履修する非正規生の内訳

身分	履修者数				合計 (%)
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
特別聴講学生	178	229	219	208	834 (38.94%)
聴講生	301	290	342	375	1308 (61.06%)
非正規生合計	479	519	561	583	2142

表19 特別聴講学生のレベル別全学共通科目日本語科目の履修状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017年度		2018年度		
	前期	後期	前期	後期	
初級I	32	63	42	62	199 (23.86%)
初級II	24	40	38	20	122 (14.63%)
中級I	25	49	49	40	163 (19.54%)
中級II	43	46	38	32	159 (19.06%)
上級	54	31	52	54	191 (22.90%)
合計	178	229	219	208	834

表 20 聴講生のレベル別全学共通科目日本語科目の履修状況

レベル	履修者数				合計 (%)
	2017 年度		2018 年度		
	前期	後期	前期	後期	
初級 I	102	37	115	64	318 (24.31%)
初級 II	23	17	36	53	129 (9.86%)
中級 I	54	44	85	59	242 (18.50%)
中級 II	29	102	55	122	308 (23.55%)
上級	93	90	51	77	311 (23.78%)
合計	301	290	342	375	1308

## 5. 技能別履修状況

本節では、総合学習コース及び特定技能強化コース、並びにアカデミック・スキル科目に分けて履修状況を考察したいと思います。

総合学習コースの中の 8H コースに関しては、1 科目当たりの平均的履修者数は、全体平均の

表 21 総合学習コースの履修状況

授業形態	レベル	履修者数				合計 (%)		
		2017 年度		2018 年度				
		前期	後期	前期	年後期			
総合学習コース	8H コース	初級 I	13	12	12	32	69	164
		初級 I	26	23	33	13	95	
		初級 II	19	26	26	26	97	
		中級 I	18	27	26	50	121	
		中級 II	15	28	26	35	104	
		合計	91	116	123	156	486 (58.63%)	
	4H コース	初級 I	1	9	23	15	48	
		初級 II	4	6	15	14	39	
		中級 I	8	9	19	9	45	
		中級 II	11	11	11	13	46	
		合計	24	35	68	51	178 (21.47%)	
	1 コマ総合	中級 I	—	—	2	2	4	
		中級 II	—	—	9	3	12	
		上級	—	—	3	0	3	
		合計	—	—	14	5	19 (2.29%)	
統合技能型	読解・作文	初級 I	31	19	25	24	99	
		初級 II	6	7	18	16	47	
		合計	37	26	43	40	146 (17.61%)	
総計		152	151	248	252	829		

表 22 8H コース履修者の身分別内訳

身分	2017年度		2018年度		合計 (%)
	前期	後期	前期	後期	
学部生	0	0	0	0	0 (0.00%)
大学院生	23	22	28	42	115 (23.66%)
非正規生	68	94	95	114	371 (76.34%)
合計	91	116	123	156	486

22.04をやや上回り24.3となっている。8Hコースは週4コマ構成であり、部分的履修は認めていないため、日本語学習にある程度時間が割けることが履修の条件となる。このような集中的且つ総合学習のニーズを有している学生層を抽出すると、表22の通りとなる。非正規生の履修が76.34%にも上り、大学院生はそれに次ぐ。それに対して、学部生はこのようなニーズを有していないことになる。

次に特定技能強化コースについて見てみると、表23の通り、履修者が最も多かったのは会話クラスである。聴解、作文がそれに次ぐ。産出技能に対するニーズが高く、聴解能力育成も重視されている結果となる。

特定技能強化コースの平均履修者数は24.82で、全科目平均の22.04をやや上回っている。

アカデミック・スキル科目の履修状況は表24の通りである。履修者が最も多いのは高度な産出技能が要求される論文・レポート作成科目であり、講義聴解がそれに次いで履修者数が多い。これらの科目の平均履修者数は25.94%と全科目平均を上回っており、アカデミック・スキル養成のニーズが高いことが窺われる。

前述したように上級レベルの科目は学部指定のクラスであることも多く、その点からすれば、学部学生のニーズに即したものであることが望ましいと言える。

特定技能強化コース及びアカデミック・スキル科目の履修について身分別に考察すると、どの技能あるいはスキルにおいても非正規生の履修が最も多い。学部生の場合、アカデミック・スキル、会話、読解の順に履修者が多いことが分かる。更に、特定技能及びアカデミック・スキル科目の履修が学部生の日本語履修の89.72%を占めている。大学院生が最も多く履修しているのは会話技能で、アカデミック・スキル、聴解が次いで多い。ここから、コミュニケーション能力やアカデミック・スキル習得に対して高いニーズを有していることが窺える。一方、非正規生の履修は会話、聴解、作文の順に多い。

表 23 特定技能強化コースの履修状況

特定技能強化 コース	レベル	履修者数				合計 (%)
		2017 年度		2018 年度		
		前期	後期	前期	後期	
会話	初級 I	32	31	31	30	124
	初級 II	18	10	23	20	71
	中級 I	14	15	30	21	80
	中級 II	24	43	30	49	146
	上級	36	32	44	38	150
	合計	124	131	158	158	571 (30.28%)
聴解	初級 I	26	11	24	19	80
	初級 II	9	10	16	18	53
	中級 I	7	15	29	15	66
	中級 II	16	22	22	33	93
	上級	34	13	24	29	100
	合計	92	71	115	114	392 (20.79%)
作文	中級 I	22	12	22	22	78
	中級 II	20	46	27	46	139
	上級	39	18	33	35	125
	合計	81	76	82	103	342 (18.13%)
読解	中級 I	20	18	24	16	78
	中級 II	23	21	22	28	94
	上級	29	21	30	29	109
	合計	72	60	76	73	281 (14.90%)
漢字	初級 I	31	20	42	30	123
	初級 II	20	16	16	12	64
	中級 I	24	29	34	26	113
	合計	75	65	92	68	300 (15.91%)
総計		444	403	523	516	1886

表 24 アカデミック・スキル科目の履修状況

アカデミック・スキル	レベル	履修者数				合計
		2017 年度		2018 年度		
		前期	後期	前期	後期	
研究発表	上級	29	20	18	22	89
講義聴解	上級	35	21	23	22	101
討論技術	上級	31	18	14	25	88
論文・レポート作成	上級	36	27	39	35	137
合計		131	86	94	104	415



表 25 特定技能強化コース及びアカデミック・スキル科目の身分別履修状況

技能	履修者数					
	身分		学部生	大学院生	非正規生	合計
	年度	学期				
会話	2017年度	前期	5	29	90	124
		後期	10	15	106	131
	2018年度	前期	21	34	103	158
		後期	14	43	101	158
	合計		50	121	400	571
聴解	2017年度	前期	4	20	68	92
		後期	1	6	64	71
	2018年度	前期	4	20	91	115
		後期	15	25	74	114
	合計		24	71	297	392
作文	2017年度	前期	4	27	50	81
		後期	1	6	69	76
	2018年度	前期	15	17	50	82
		後期	12	17	74	103
	合計		32	67	243	342
読解	2017年度	前期	15	12	45	72
		後期	7	7	46	60
	2018年度	前期	17	14	45	76
		後期	8	10	55	73
	合計		47	43	191	281
漢字	2017年度	前期	0	18	57	75
		後期	1	11	53	65
	2018年度	前期	0	19	73	92
		後期	1	19	48	68
	合計		2	67	231	300
アカデミック・スキル	2017年度	前期	33	29	69	131
		後期	18	9	59	86
	2018年度	前期	31	22	41	94
		後期	16	21	67	104
	合計		98	81	236	415
総計			253	450	1598	2301

## 6. 結び

以上、カリキュラム改編後の履修者データを基に本学における日本語学習ニーズについて考察してきた。その結果、レベル別に見ると全学共通科目日本語科目では、上級レベルの履修者が最も多く、一方課外の日本語学習支援講座においては入門コースの履修者が最も多いことが分かった。そ

のことから、それぞれのプログラムが異なるニーズに応じており、独自の役割を果たしていることが示唆される。身分別の考察を通して、非正規生が履修者全体において非常に高い比率を占めていること、学部生と非正規生の履修動向には異なる部分も現れており、それぞれの学生層のニーズに異なる側面があることが明らかになった。一方、技能別の考察を通して、学部生の履修は特定技能強化コース・アカデミック・スキルコースが中心であることが示された。これらの科目は不足ニーズや必要性ニーズに即していると考えられる。一方、総合学習コースの履修は非正規生に多く、限られた留学期間中に日本語を集中的に学びたいという非正規生のニーズが窺われる。

本稿の分析対象としたデータは4学期間に限定されており、統計的傾向性を抽出するには至っていない。その上、履修者数の延べ人数を基準にしており、実数については全く考察していない。また、履修動向は本稿で考察対象としていない開講曜日や時間帯、母国大学の様々な履修要件等に左右されており、本稿で考察したのはその現状の中でのニーズに過ぎない。履修者に対するアンケート調査やインタビュー調査も交えたより綿密な分析を行いつつ、学習過程の進行と共にニーズがどのような変容を受けるか、ニーズと学習者の将来像がどのように相関するのかなどについて考察することを今後の課題とする。

#### 注

- 1 2017年度に実施されたカリキュラム改編以前にも一部の日本語科目は全学共通科目外国語科目として位置付けられていた。
- 2 各プログラムの身分別履修可否については第2節及び第4節で詳述する。
- 3 1) は necessities、2) は lacks、3) は wants の訳である。
- 4 ここでいうコマとは90分の授業を意味する。
- 5 Aは前期開講科目、Bは後期開講科目を指す。前期ではカバーする範囲の前半を後期は後半を扱う科目。以下同様。なお、4Hコースは、8Hコースと同等の内容を2学期かけてカバーする。
- 6 日本語初級18Hコースは同じ内容のコースを2コース開講している。
- 7 大学院共通科目は課外の日本語学習支援講座としても位置付けられている。
- 8 本稿では、全学共通科目日本語科目に対して「履修する」という用語を、一方課外の日本語学習支援講座に対して「受講する」という用語を区別して用いる。なお、両者を指す共通用語として「履修する」を用いる。
- 9 「特別研究学生」(General Exchange Special Research Student の略)。単位取得を目的とせず、指導教員の指導の下で専門的研究を進める学生。他の言語で指導を受けられる場合もあり、日本語能力を必ずしも必要としない。
- 10 3.1で述べる履修相談期間中に行う諸登録変更は元の履修登録システムに反映されない。それ故、履修者数の実数の正確なデータ収集は困難であり、本稿の分析は延べ数に限定して行う。
- 11 2017年度前期はマークシート方式のテストを会場で配布し受験させる形を取り、試行的に一部の学生に対してのみ、オンラインプレースメントテストを実施した。それ以降は全学生に対してオンラインテストの形で実施している。
- 12 免除者全員が履修登録するとは限らないので、免除者数は継続者数を必ずしも意味するわけではない。
- 13 京都大学国際教育プログラム学生を示す。
- 14 日本語科目の実施運営は国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターが行っている。
- 15 日本語予備教育集中プログラム生は日本語を集中的に学習するので、1学期平均的に約8コマ(初級～中級の学生の場合、約5科目(4コマ構成の8Hコースを含む))を履修している。

## 参考文献

- 小河原義朗・鄭 恵先 (2012) 「日本語教育教務システムの開発と課題」『北海道大学留学生センター紀要』第16号、pp.93-108
- 国際交流基金編 (2006) 『日本語教師の役割／コースデザイン』 ひつじ書房
- 国際交流基金編 (2013) 『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』 くろしお出版
- 田中 望 (1993) 『日本語教育の理論と実際』 大修館書店
- 仁科喜久子監修 (2012) 『日本語学習支援の構築 言語教育・コーパス・システム開発』 凡人社
- 日本語教育学会編 (1991) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』 凡人社
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』 大修館書店
- 畑佐由紀子 (2018) 『日本語の習得を支援するカリキュラムの考え方』 くろしお出版
- 札幌寛子 (2011) 『日本語教育のためのプログラム評価』 ひつじ書房
- 古川嘉子 (2018) 「日本語教育におけるコースデザイン論の展開とその課題」『国際交流基金日本語教育紀要』第14号、pp.7-18
- 丸山敬介 (2005) 『日本語プログラム運営の手引き』 スリーエーネットワーク
- Nation, I.S.P. & Macalister, J. (2010), *Language Curriculum Design*, Routledge.
- Richards, J.C. (2017), *Curriculum Development in Language Teaching*, Second Edition, Cambridge University Press
- ウェブサイト
- 京都大学国際高等教育院日本語・日本文化教育センターが提供する日本語教育について：<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/education-center-for-japanese/japanese-language-classes>
- 京都大学国際交流、交換留学・短期留学・研究生等：<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/international/students1/study1/exchanges>
- 全学共通科目履修の手引き（外国語）：  
<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0796.pdf?1520873205>

# Course Selection Trends of Kyoto University Japanese Language Learners: An Analysis of Course Registration Data from 2017 Spring Semester to 2018 Fall Semester

Ruchira Palihawadana

## Abstract

This analysis attempts to reveal the trends seen in course selection of Kyoto University Japanese language learners after the curriculum reform implemented in April 2017, having as its target, registration data of four semesters beginning from the spring semester of 2017. By focusing on Japanese language learners' level of studies, student status as well as the type of skill they chose to learn, it aims at revealing the needs of university-level Japanese language learners. The results show that the non-degree seeking students account for 68.43% of the total number of registrations for Japanese language courses. This group of learners occupies the highest percentage in elementary level courses as well as courses aimed at acquiring integrated skills. In contrast, most of the regular degree seeking undergraduate students take courses from the most advanced level and they tend to enroll in courses designed to acquire specific skills or academic skills. This suggests that the regular degree seeking undergraduate students have different needs from that of the non-regular students.

**Keywords:** Japanese teaching at university level, course selection trends, student status, needs analysis